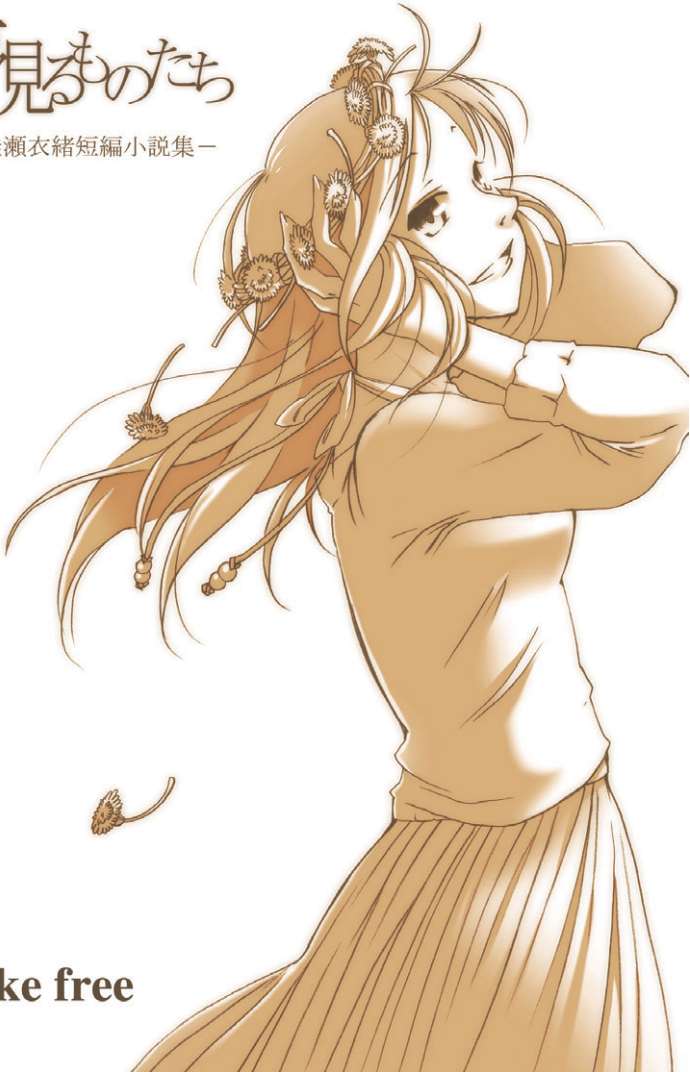
夢見るものたち

－桂瀬衣緒短編小説集－



take free

夢見るものたち

―桂瀬衣緒短編小説集―

著：桂瀬 衣緒
イラスト：烏楽

この本は著者が過去約十五年の間に、気の向くまま
書きなぐったものを改変したりしなかったり、
結構適当に収録しております。
部分的あるいは全体的に、眉をひそめられそうな内容や
「え？だから？」と言いたくなるような内容、
中二病くさい表現等が見られますのでご注意ください。

「……新婚旅行？」

「そう。昔一緒に遊んだところ覚えてる？　あのタンポポがもう一度見たいの」

目次

1	牛	5
2	居眠り	7
3	大王降臨	11
4	Gatekeeper	16
5	Duplicate Key	19
6	高き塔より	22
7	Strangers	25
8	僕の罪	31
9	夢見るものたち	37

［牛］

「こら！　食べてすぐ寝ころばないの！」
ママは言いました。
「まぁくん！　豚になっちゃうわよ」
「豚になんかならないよぉだ。それにそれ、みんな牛だって言ってたよ？　ママおかしいんだー」
「うちでは豚なの！　ほら、起きなさい！」
「ぶたになったらねてくらすからいいよぉだ」
まぁくんは言うことをききません。
そしてまぁくんはそのまま眠ってしまいました。

朝になって目を覚ますと、ママがまぁくんの顔を不思議そうにのぞき込んでいました。
「おはよう、ママ」
ママは答えません。不思議そうな顔のまま、パパに話しかけました。
「ねえ、パパ」
「なんだい？」
「どうしてこんなところに豚がいるのかしら」
「豚？　なんのこと？　ママ」
まぁくんがたずねてもママは答えません。まるで聞こえていないようです。
「本当だ。豚だね。きっと今日の晩ごはんのために神さまが与えてくださったんだよ」
「そうね。今日はご馳走だわ」
「ねえ、ママ。豚なんていないよ？」
まぁくんの声は誰にも届きません。
まぁくんは鏡を見ましたが、まぁくんは豚には

なっていませんでした。
しかし、まぁくんを見ながら恐ろしい笑みを浮かべてママは言いました。
「おいしそうな豚ねぇ」

その夜、まぁくんはソーセージになりました。
まぁくんを食べながらママは言いました。
「今度はもっと素直そうな子を選びましょうよ」
「そうだねぇ」
「四丁目の山田さんとこのけんちゃんなんかどうかしら」
「いい子に育ちそうだね」
「時期もいいわよ。ちょうど十ヶ月くらいだったはず」
「よし。明日は用があるからあさってにしようか」
「はあ……五年も育てたのにまぁくんなんか生意気にしからならなかったわ。その前もよ。けんちゃんはうまくいくかしら」
「なぁに。うまくいかなかったらまたこうすればいいことさ」
「そうね。あぁ、あさってが楽しみだわ」
そういってパパとママは笑いました。

［居眠り］

いい日和だった。

僕は友人の田上を連れて電車に乗った。どこに行きたいという訳ではないけど、こんな日にじっとしているのがもったいない気がしたのだ。

座席にふたり並んで座っていると、雰囲気でお互いに何を考えてるかわかった。

すなわち、「ここに一緒にいるのがコイツじゃなければ……あぁ、彼女ほしい……」。

しかし、口に出してもお互いむなしくなるだけだということは充分わかってたから、あえて口にしなかった。

とはいえ、こんな天気のいい日に電車のなかで、ちらちらと相手の様子をうかがって何もしゃべらない男子高校生ふたり組み、なんていう設定は、ひょっとして他人から見ればアヤシイ関係に見えるんじゃないか？

そういうわけで僕は何か話題を探しはじめた。いつもいつも学校で一緒のこいつと一体何をしゃべればいいんだ？　いい天気だな、と言ってみたところで、そうだなとかえされて終わりになりそうだ。だいたいわざわざ話題にすることじゃない。

何かいいネタないかな、と車内を見まわしてみる。天気のせいで結構多くいた乗客も、さっき止まった駅でほとんど降りていた。残っている客もマンガや新聞を読んでいるくらいでたいした特徴もない。

つまんねぇな……と思ったその時だった。
僕はチラッと目をやったその先に、居眠りをしている若い女性を見つけた。
「あれ？」
「ん？」
田上が、どうかしたのか？　と横で首をかしげる。
「あ、いや、あの人さぁ、ずっとあそこにいないか？」
「そういやそうかもな。でもたいしたことじゃないだろ？」
「まぁそうだけど……ずっと眠ったままだぞ？変じゃないか？」
「ん、そういや、もう主要な駅は八つぐらい過ぎてるな」
僕達は今日、行けるところまで行ってみようなどと終点までの切符を買っていた。この電車は終点まで行くととんでもない田舎町につくらしい。
「僕らが乗ったときは、あの人もういたぞ、っていうかずっと寝たままだ」
「乗り越してるんじゃないか？」
「これからどんどん田舎のほう行くぞ。起こしてやったほうがいいんじゃないか？」
「いや、でも……」
「そうだなぁ……ま、いっか。ほっとこ」
「そのほうがいいと思う」
しかし、終点まであと三駅というところになってもその人は起きなかった。電車の窓に映るのは見渡す限りの田んぼと畑。
車内には僕らとその人以外、誰もいない。

僕はふと気づいた。
「なぁ。あの人やっぱり変じゃないか？」
「そうだなぁ、やっぱり起こしてやったほうがいいよなぁ」
「いや、そうじゃなくて」
「何だよ」
「あの人ずっと動かないんだよ。ピクリとも……」
田上の表情が変わる。
「ま、まさか……冗談だろ？」
「おまえも見てたはずだ。……やばいぞ、あの人……」
「し、死んでるってのか？」
そう言えば彼女の顔は真っ白だった。まるで死人のように――。

電車はゆっくりと進んだ。
「やっぱり、車掌さん呼んだほうがいいんじゃないか？」
「そうだな。じゃあ僕が行ってくる」
「えぇえ？　おれひとりかよ」
「一緒に行くか？　死体の前通らなきゃいけないぞ」
「ひとりにされるよりましだ」
「田上……おまえ、怖がりだったのか……」
「そうだよ。悪いか？」
田上は開き直っていた。
「んじゃ、行くぞ」
「お、おう」
おそるおそるその死体の前を通ろうとしたときだった。

『太田ぁ、太田です』
車内アナウンスが響き渡った。終点のひとつ前の駅に着いたのだ。
「うわぁ」
田上が小さな悲鳴を上げる。
「落ち着けよ、アナウンスぐらいで……」
「ばか、ちげーよ」
「え？」
死体が目をあけていた。
「……」
死体はそのまま、たった今開いたドアをくぐるとさっさと太田駅の改札を出ていってしまった。
呆然と立ち尽くす僕らを尻目に。
「おねえさん。化粧、濃いよ……？」

［大王降臨］

この世の中に何人『その日』が訪れることを願った者がいただろう。

一九九九年七の月。旧暦だから八月だとも言われていたあの予言。

恐怖の大王はおりてくるのを忘れてしまったのだろうか。この汚らわしい、人間という生き物を葬り去ってくれるのではなかったのか。

結局、何も起こらなかった。

少なくとも、この東洋の小さな島国では。

「そういや『予言』って、結局当たらなかったよな……」

突然、伸也が言った。

九月に入り、新学期が始まっていた。

学校帰りにいつもの四人で喫茶店により、夏休み中のことを話していたところだった。

「なに？　おまえ、まさか本気で人類滅亡信じてたわけ？」

義晃がバカにした口調で言う。

「いや、信じてたって言うと、ちょっと違うんだけどさ」

「まぁね……べつに期待もしてなかったけど、なんとなく残念に近い感覚は私もある」

香苗が伸也に助け船を出すように感想を述べた。

香苗はいつもさりげなくフォローにまわる。

「本当に……そう思う……？」

めずらしく、いつも無口なさやか清花が口を開

いた。いつも通りの真顔だった。
清花は三人からすれば少しかわった娘だった。
暗いわけではなく、控えめなわけでもなく、ただ、いつも黙っている。
いつも一緒にいるものの、三人とも清花だけはいまいち何を考えているのかわからなかった。
三人は不思議そうな顔で清花を見た。
「どういうこと？」
「これからなんか起こるとでも……？」
清花は首を振った。
「そんなことじゃない」
「じゃあ……」
「もう、人類は滅びてるのかもしれないってこと」
「は？」
三人は顔を見あわせた。
「これから私が言うことは冗談として聞いて。本気にするとあぶないから」
「……」
「このなかに、誰か七月……いや、八月からずっと起きてる人っている？」
「寝てないってことか？」
「いるわけねーじゃん……」
「そう、いるわけないよね。そして、この世界中探してもたぶんそんな人いない」
三人は清花がなにを言いたいのかまったくわからなかった。
「つまり、自分が寝てる間になにが起こってても不思議じゃない」
「そうだけど……何が言いたいの？」
「私たちはもう死んでる」

「……」
一斉に怪訝な顔をする三人をみて清花は言った。
「いや、この言い方は適切じゃない。正確に言うと脳だけの存在になってる」
「なんとなく……話がわかってきた」
「つまり、夢であると……」
「いや、でも夢ならこんなふうにすればわかるはずだぞ?」
伸也は頬をつねって見せた。
「確かにただの夢ならね。でも、私はいま寝てるあいだに脳だけの存在になったって言ったの」
「寝てるあいだに……?」
「そう、寝てるあいだに。私たちの意識がないあいだに、恐怖の大王……この理論だと地球外生命体っていうのが一番わかりやすいかな、いわゆる宇宙人ってやつが私たちを実験材料として脳だけ摘出。そうして夢を見せている。そんな科学力があるかどうかはもちろんわからない。でも宇宙人がいると仮定した場合、それにどれほどの科学力や文化があるかはわからないからね。夢をのぞき見しながら適度に痛覚やなんかを脳に情報として送り込んでるのかもしれない」
「怖い……もしそれが本当だとしたら……」
「大丈夫だよ……そんなこと……」
「あるわけないって言いたいの?残念だけどこの理論はどうやっても否定しきることができないから恐ろしいのよ。どうしても証明することが……できないの」
「でも、もしそれが本当だとしても……俺たちはどうすることもできないわけだろ?」

「そうよ」
「じゃあ……本当じゃないとして生きるしかないじゃないか……」
「だから、最初に言ったじゃない。冗談としてとれって。本気にするとあぶないって」
「……はは……清花……たまにしゃべったと思ったら冗談ちょっとキツすぎるぜ……」
義晃が顔を引きつらせながら笑った。
「哲学かなにかでそういうのがあるんだって。『地球は昨日できたものだ。私たちの記憶は植え付けられた仮想記憶だ』って言われたら否定はできない……なにをもってもそれを証明することはできない」
「なるほどね……」
「俺には絶対むかねぇな……哲学……」

義晃が言った。
伸也と香苗は笑った。
そして、清花も少し笑った。

香苗は知っていた。
清花の手首にかすかな切り傷の跡があることを。
『証明』の方法はあるのだ。
清花がそれを実行しようとしたことはあきらかだった。
帰り道、香苗は他のふたりに聞こえないように、こっそり清花に言った。
「生きていることを『証明』するために自殺するなんてばかげてるよ？清花」
清花は反射的に自らの手首に触れた。
「……もうしないよ」

照れたように言った清花を見て、香苗は笑った。

帰り道を夕日が紅く染めていた。

清花は、この夕日は本物なんだろうかと思っていた。

「……ま、いっか」

［Gatekeeper］

久しぶりに足音を聞いた。
わかる。十五・六の子供だ。

「帰れ」

わかる。言った瞬間、少年の顔がこわばった。
「ここはお前みたいな奴が来るところじゃない」
「……もう、いるところがないんだ」
俺は数ヶ月ぶりに顔をあげた。
その声は、少年が出すにしてはあまりにはかなげなものだったから。

少年は微かに笑みを浮かべていた。
「ここがどこだかわかってるのか？」
「わかってる」

ここはあの世とこの世をつなぐ門。
むこうの世界はどうなっているのかなんて俺も知らない。
死ななきゃここは通れないから。
それに俺はここを離れることができないから。

「帰れ。生きた人間はここを通れない」
「じゃあ……」
少年は微笑みをはっきりとした笑みにかえて言った。
「あなたがぼくを殺してくださいよ」

「俺は何もせん。死にたきゃかってにやれ」
俺は持っていたナイフを少年に放った。
それは地面にぶつかって、カラン、と音を立てた。
少年はナイフを拾い上げ、笑顔で言った。
「ありがとう」
少年はしばらくナイフを見つめていた。
やはりとまどいがあるのか、と俺は思った。
「ねぇ……どこが確実だと思う？」
意外なことばだった。
「さぁな」
「やっぱり首かな。心臓とかだと位置がずれるかもしれないし」
「……」
「切り落とすくらいやれば死ねるよね」
少年はおかしいくらいの笑顔で言った。
「じゃあね、お兄さん。ありがとう。さよなら」
そう言って少年はナイフを首に当てる。
ナイフはとてもよく切れた。
音もなく、少年の首を通り抜ける。
数秒後、少年の頭は体をはなれ、うつろな瞳をした生首が少年の足下に転がった。
「あれ？」
首が言った。
「お兄さん、なんかぼく死んでないみたいなんだけど」

脳天気な声だった。
「ああ。生きてるっていうのとはちょっと違いそうだがな」
「どうしよう？　このままはちょっとつらいよね？」
「なにが？」
「いろいろと」
「……そうかもな」
俺は適当に答えた。

本当は知っていた。
この門の前では、死にたい人間がなにをやっても死ぬことはない。
それどころじゃない。
この門は人の望みをなにひとつ叶えたりはしないんだ。
ここから離れたいと思い続ける限り離れられない俺を見ればわかるように。

だが、四千年もこうしていると、たまには神様が扉の向こう側からしゃれたことしてくれるもんだ。
俺はこうして首と胴体の離れた自殺志願者という奇妙な話し相手を得ることができた。

今日も少年は自分の首を小脇に抱えながら俺にたずねる。
「ねぇどうやったら死ねると思います？」
「……さぁな」

［ Duplicate Key ］

私が彼と出会ったのはちょうど一年前。
今日も私は仕事の帰り、彼の家へと向かう。
彼は恥ずかしがり屋さんだから何も言わない。
でも私にはわかるの。
彼は私を愛してくれてる。
だってそうでしょ？
嫌いな女に、合い鍵を持たせておく？
自分は外に出ないからって、ひとつしかない鍵を私にくれたのよ？
だから私のはそこいらの女が持ってるようなやつじゃない、正真正銘、世界にひとつしかない、とってもとってもすてきな合い鍵なの。

そう、一年前のあの時、降りしきる雨の中で、私と彼は運命的な出逢いをしたの。
お気に入りの真っ赤な車で、仕事場から帰る途中だったわ。
私の車の前をひとりの若い男が横切ったの。
それが彼だった。
彼は雨に濡れて、髪からしずくがポタポタ落ちてたわ。
とってもすてきだった。
こんな雨じゃタクシーもつかまらないだろうし、もともと人通りの少ない道だったから、私、彼をのせてあげることにしたの。
座席が水浸しになっちゃったけどそんなこと気にしない。

こんなすてきなヒトと車の中でふたりっきり。
バカみたいだけどすっごくドキドキしたわ。
彼はしゃべりかけてもなにも答えてくれなかった。
行き先すら答えてくれなかったのよ？
しかたないから荷物からこぼれ出てた免許証の住所を見たの。
本当、あの時からシャイだったのね。
彼の家は最新のセキュリティシステムを導入した高級マンション。
家賃も高いはずなのに彼はひとりで暮らしてるみたい。
一体どこで働いているのかしら？
聞きたかったけど初めて会ったヒトなのに失礼かなと思ってやめたわ。
それに彼の雰囲気からして、あぶない仕事とかしてるヒトかもしれないと思ったから。
なんだかミステリアスでますますすてきよね。
それから一年経った今でも彼はずっとかわらない。
あの頃のようにずっとすてき。
でも彼が一番すてきだったのはやっぱりあの時よ。
本当、タイヤの下で真っ赤に染まったあなたの姿 ― 忘れられないわ。
絶対にはなさない。
誰にも渡さないわ。

彼はずっと私のものよ。
合い鍵をくれた私の大切な人。
合い鍵 ― 指紋照合で使うあなたの親指、なくすのがこわくてずっとポケットに入れてるっていったらあなたは笑うかしら？

そろそろ、有効期限が切れるころだわ。
今日は防腐剤、忘れずに買っていくわね。

愛してるわ。私の運命のヒト。

［高き塔より］

彼は言った。

「高所恐怖症の人間は、なぜ高いところが怖いんだと思う？」

私は黙って首を振る。

「怖いんだってさ。自分が、いつかそこから飛び降りるんじゃないかって」

彼の言葉には、確かに一理あるような気がした。

「おいで。怖くないから」

「だめ……やっぱり怖いよ」

彼に手招きされるまま、一歩前へ踏み出したものの、そこから先は自分の足が、凍りついたように動かなくなる。

学校の屋上。校庭では感じられない、強い風が背を押す。

それでも。

それでも私の足は動かなかった。

目の前に拡がる風景。いつもとは違う。ここは高い。高い。高い。高い。

――怖い。

ぐらり。

目の前が、世界が揺らぎ、立っていられなくなる。

呼吸が荒い。

いや、それは錯覚かもしれない。

今、私は呼吸をしているのか？

わからない。激しく脈動しているはずの心臓の

音すら聞こえない。

「……ぁ」

震えた唇から、微かに声が漏れる。

「大丈夫。ゆっくりでいいから、そのまま這っておいで」

彼に言われるまま、硬直した腕で、足で、移動を始める。

自分の呼吸音さえ聞こえないのに、彼の透き通った声がやけに脳に響く。

「大丈夫だよ。君はここから落ちたりなんかしない」

＊

「君に、あの景色を見せたいんだ」

つきあい始めて数ヶ月。放課後、彼はいつも私を屋上に誘った。

夕焼け空が、本当に綺麗だといって。

それを一緒に見よう、と。

＊

「そうだ。君は鳥なんだよ」

フェンス代わりの低い壁に腰掛けて、ちらりと私を見る。

「鳥なんだから、落ちたりしない。翼があるんだから飛べばいいだけだ」

獣みたいに這いつくばっている私を背に、饒舌に語る。
「これは暗示だよ。ね？　もう怖くないだろ？」
足下まで辿りつき、一息ついた私の腕を彼がつかんだ。
そのまま、引っぱり起こされる。
「――――」
言葉を失う。
そこにあったのは、真っ赤な景色。
何もかもが赤く染まって、太陽としばしの別れを惜しんでいる。
「綺麗だろ？」
「……うん」
ふと、眼下に拡がる闇が目に入る。
あぁ、大丈夫。私、もう、落ちることは怖くないんだ。だから。
とん。
その音はとても軽く。
彼の温かい感触が、私の手に残った。
空中に身を乗り出した彼が、一瞬振り返ったような気がした。
――　ナ　ゼ　？
簡単。
私が高いところを怖がっていた理由はふたつ。
ひとつはあなたの言ったとおり。そしてもうひとつが――
「いつか自分が、そこから『誰かを突き落とす』んじゃないか」だっただけ。

［ Strangers ］

「おかしいよなぁ」

学校の帰り道、また、俺の隣にいるヤツがつぶやく。

つきあいも十年以上になるが、俺は未だにこいつのことがよくわからん。

家が隣ということもあって、体が弱いらしいこいつのことをその母親に頼まれ、俺はガキの頃から毎日こいつと一緒に学校へ行っている。

しかし、こいつの一体どこが「体が弱い」んだか。

こいつがうちの隣に引っ越してきたのは俺が幼稚園を卒業した後だから、それまでのことはどうだか知らないが、俺とともに同じ小学校へ入学し、高校へ通う今の今まで、こいつが病気で学校を休んだことはない。

インフルエンザが流行って、学級閉鎖になろうが、学校閉鎖になろうが、こいつは元気だった。

……少なくとも俺よりは。

それなのにどうしてこいつんとこのおばさんは「体が弱い」と思いこんでいるんだろう。

理由は見当が付く。ただ、こいつの頭が異常に良かっただけだ。

こいつは、一度たりとも徒歩の遠足やマラソン大会などに参加したことがない。

親に「うちの子は体が弱いんです」といわせておけば、行事不参加もとがめられはしないだろう。

そのために、こいつは親や教師の前では「体が弱い」ふりをしているんだ。
俺は一度だけこいつに「何で遠足行かないの」と聞いたことがある。
こいつは答えた。「んなことしたら疲れるだろー」。
それが小学2年の時だった。

「やっぱり変だよなぁ」
「おまえのほうがよっぽど変だ」
とりあえず軽く流してみた。
俺のわずかな抵抗だった。
「いや、そりゃわかってるけどさ……なぁ変だと思わないか」
やはり聞いてやらなきゃならないのか……。
相手にしたくはない。
疲れるんだよ、おまえといると。
最近のこいつの趣味は、社会やらの定説に異論を唱えることらしい。
とはいえ、こいつの言ってる意味が俺にはわからんし、もうわかろうとする気力もなくなってきていた。ただ、「はやくうちへ帰りたい」。そういう気持ちで適当な相づちをうち続けるだけだ。
ため息混じりであることを気付かれないように気をつけながら、結局俺は口にする。
……憂鬱な時間の始まりを告げるこのセリフを。

「何が」

かくして、俺の恐怖の時間は始まった。

「宇宙人」
頭のなかで、「はーいみなっさーん。今日の議題は宇宙人についてでーす」と言ってみた。
……って宇宙人？
宇宙人って言ったのか、こいつ。
「宇宙人が何？　変だってか。だからどうしたんだよ」
ちょっと腹が立ってきた。今日は宇宙人話かよ……冗談じゃねぇ。
いるかどうかすらわからんくせにうだうだぬかしてんじゃねぇよ。くだらねぇ。
「いや、宇宙人じゃなくて宇宙人についての考えかたが変だって言ってんの」
「……あ？」
やはりこいつの言うことはいちいち意味がわからない。
「今の宇宙人説は間違ってる」
「……」
そんなことを、大まじめな顔で言われて俺はどうすればいいんだよ……。
っていうかおまえ見たんか？
「宇宙にはたくさんの星がある。生命が生まれないものもあれば、俺らとはまったく異なった生命体が生まれることもあるだろうな。例えば、かの有名なリトルグレイだとかさ」
「あぁ……」
俺は考えることをやめた。
こいつにつきあっててもいいことなんてねぇ。
いつものように受け流せばいいんだ。
「まず、宇宙人……異星人って言ったほうがいい

か、まぁどっちでもいいや。宇宙人だとか異星人って言うと生まれてくる発想が、そいつらが人間に危害を加えようとしているとか、侵略しようとしてるってもんだ。ここがまずおかしいよな」

「そうだな」

よし。俺は頭の中でつぶやいた。今のタイミングは最高だ。これならやつも俺が話を聞いてないなんて思うまい。

「俺ら人間がほかの星で結構高度に発展した生命体見つけたとして、いきなり滅ぼそうとか思うんだかな？」

「さぁな」

「殺さないように実験するくらいはしかたないのかもしれねぇよ。俺らにはわからんけど、おとなしそうに見えても凶暴だったりするかもしれねぇって、闘争心計るもんとかそいつら持ってるかもしれんだろ。でも侵略だとかそこまですんのかな？　結局人間の発想ってのは行き過ぎなんだよ。マスコミにおどらされて、もしやつらが友好条約持ってきてたとしても、敵対心や恐怖しかない俺らにはわからんだろうな」

「あぁ、そうだな」

言いたいことはわかる気がする。が、俺には聞く気がないのでやっぱりわからん。

「そしてもうひとつのおかしい考え方は容姿についてだ。異星人がなんでみんな同じようなもんだと考える？　地球上の生物だって同じ星で生まれて同じ星で生きてんのに全然違うだろ？　異星人には種類がある。数種類なんてもんじゃなくて、もっといるはずだろ。そんなかに俺らと同じよう

な格好して同じような体の仕組みを持ってるやつがいないと言い切れるか？」
「う～ん……そうだなぁ」
俺の聞いてるふりもだんだん板に付いてきたようだ。
「いるとしたらもう人のなかに潜んでる可能性だって充分にあるってことだよ」
「あぁ、そうだな」
あ、さっきと同じセリフだ。まずい。聞いてないことがばれたか？
でも俺のセリフは会話からはそれていないはずだ。
しかし、こいつはそういうのには異常に敏感だった。
顔が近寄ってくる。なんか文句言ってくる気か？
「なぁ」
俺の話聞いてたか？と言われると思った。
「もし俺がそうだったらどうするよ？」
とりあえず、ばれていなかったと安堵する。
そしてゆっくり質問について考える。
……こいつが、宇宙人だったら？
「別に……どうするってこともねぇだろ。多分、納得する、かな」
「どういう意味だよ」
今度は俺の言った言葉にこいつが眉を寄せる。
「おまえだったら宇宙人だろうとなんだろうとおかしかねぇってことだよ」
それほど変だってことだ。自覚しろてめぇ！

そんなこんなで、やっと家にたどり着いた。
今日の講義はこれで終わりだ。
やっと解放された。

「ただいま」
「おかえりなさい。あら、怪我したの？」
肘の辺りに絆創膏が貼ってあるのに気付き、母さんが言う。
「あぁ、ちょっとコケてさ。大丈夫だって、心配すんなよ。ばれてねぇから」
絆創膏にはかすかに血が滲んでいた。
酸素連搬に鉄ではなく銅を利用した、俺の青い血が――。

あいつなら俺の正体を知ったときどうするんだろう。
明日にでも、俺の口から直接教えてやろうかと思った。
……でもやめた。

あいつの喜びそうなことなんざ、
俺は絶対してやらねぇ。

［僕の罪］

部屋に入ると、薄いカーテンの向こう側には月が浮かんでいた。
電気も付けず、月の光が差し込むだけの薄暗い部屋で、僕はそのまま玄関先に倒れ込む。
一度、床に吸い込まれるように力が抜けた後、思い出したように身体が震え出した。
「どうしよう」
のどの奥からこぼれだしたのは、予想以上に泣きそうな声だった。
部屋の中には毛布が一枚と、拾ってきたちゃぶ台がひとつ。
四日前に引っ越してきたばかりの僕の新しい部屋には今のところそれしかなかった。
重い身体をなんとか起こして靴を脱ぎ、ちゃぶ台のところまで這う。
台の上には今朝買ってきたパンがのっていた。
腹も減っていないのに、僕はそれに手を伸ばし、ひとくちかじった。
「……っ！」
一息つく暇もなく、僕は洗面台に走った。
今のどを通ったばかりのパンとともに、水道水に混じった大量の胃液が排水溝へと消えていく。
「はぁ……っ」
涙で視界がゆがむ。
一度瞬きをするとその一滴は頬を伝わず、直接洗面台に落ちた。

二滴、三滴目は頬を伝い、それでも同じように洗面台で微かな音を立てる。

のどの奥が痛くなって、僕は激しく咳き込んだ。

静かな部屋に響き渡る水音と自分の咳が、なぜか不安をあおる。

苦しかった。怖かった。

このまま消えてしまえたらどれだけ楽だろう。

洗面台の縁にしがみついて、僕はへたり込んだ。

「……助けて……」

右手にはまだ感触が残っていた。

――そうだ。僕は、罪を犯した。

＊　＊　＊

僕は携帯を持っていない。

その代わりに、部屋の片隅に古い電話機が置いてあった。

電話しないと。

決心して受話器を掴む。

ダイヤルする手が震えた。

＊　＊　＊

――どうしたの？

「未来（みき）……どうしよう、俺……」

――……

「あいつを殺したんだ、さっき」
――……！
「ずっと、ずっと、あいつがいるから苦しいんだって思ってた」
――慶……
「あいつさえいなければ幸せになれると思ってた」
――……
「でも怖いんだ。あいつがいなくなって、すべてが終わったはずなのに。これからどうなろうと、あの生活を続けるよりましなはずなのに」
――……ねぇ、慶。なんで？　なんであいつを殺したの？
「なんでって……」
――知ってる。知ってるよ。ずっとずっと辛かった。でもずっと我慢してきたんじゃない。なんで今さら……
「やっぱり許せなかったんだ」
――どうして？　もう終わったことじゃない。あいつに隠れて必死にお金貯めて、やっとあの家での生活を終わりにしたんじゃない。
「……でもあいつには何の報復もしてないじゃないか」
――恨み？　そんなことであなた、自分の人生終わりにしたの？　嘘よ。あなたはそんな人じゃないわ。
ねぇ、慶。本当の事言って？　何があったの？
「……何もないよ」
――……私が原因？
「……違う」

――じゃあ何であの家に戻ったの？
……ポケットに入ってる紙が原因じゃないの？
「……知ってたのか」
――ごめんなさい。あなたが眠ってる時に見たの。ねぇ、あれ、どういうこと？
「あいつは……未来を……君を知ってたんだ」
――……
『『お前はいらない。もうひとりだけ帰ってこい』郵便受けに入ってたんだ。ここ、どうやって調べたんだろうな。
……はは……俺はいらないんだってさ」
――慶……
「それでまたあそこへ行ったんだ。どういうつもりなのか知りたくてさ」
――バカだね……そんなの無視すればよかったのに
「自分でもそう思うよ。あいつ……なんて言ったと思う？」
――……わからないよ、そんなの……
『『お前じゃない。お前は殴りがいがないんだ』』」
――……っ
「許せなかった。親父にとって俺はそれだけの存在だったんだ」
――でも……それでも……
「もういいよ」
――……
「なぁ、未来？」
――……？
「結婚してくれないか？」
――……え？

「一緒になってくれないかな」
――……できないよ。
「なんで？」
――わかってるくせに。
「いいんだよ。そう思ってくれるだけで。紙なんか問題じゃない」
――お互い顔も見たことないのに？
「ははっ、そりゃそうだけど。ダメかな？」
――ううん……ありがとう。
「あぁ、ありがとう、未来。それから、今までありがとう。しばらく会えなくなるけど俺……、忘れないから」
――慶……？
「この罪は……俺ひとりで背負うから」
――……ねぇ、慶？
「ん？」
――ひとつだけ聞かせて。
「何？」
――なんで、その時、私と代わらなかったの？
私は……その為に生まれたのに。
「……これ以上、君を傷つけたくなかったんだ」
――……ありがとう。
「未来。俺は、あの頃より、少しは強くなれたかな」
――……強くなったよ。本当に。
「でも、ごめん。もう一度だけ力を貸して」
――……うん。いいよ。
「どうしても手が震えてうまくいかないんだ」

＊　＊　＊

未来は、僕が五歳の時から、僕の中にいた。
父親の虐待に苦しんでいた僕が生み出した罪。
傷つき、苦しむ、卑怯な僕の代役。

僕は彼女の力を借りて、ダイヤルする。
一、一、〇。

声の震えを必死に抑え、ひとことひとことしっかりと言葉にする。
「俺、父親を殺しました」

そして、僕は心の中、彼女に別れを告げた。

大丈夫。
どれだけ時が流れても、きっとまた会える。
僕は待てるよ。
君のおかげで――強く、なれたから。

［夢見るものたち］

やわらかな朝の光に包まれ、僕はいつものように目を覚ます。

ベッドの横に置いてある棚の上にあるはずの目覚ましを、目を閉じたまま、手探りでつかもうとする。……が、手は空中で空回りするだけで、目的のものには一向に触れられない。

――あれ？　寝ぼけて叩き落としたかな？

僕はぼんやり目を開けた。十年来、寝起きを共にしてきた目覚まし時計。

叩き落としたわけではなかった。それはちゃんとそこにあった。

多少、場所が移動させられていたけど。

針が示す時刻は8時半。

――8時半!?

しまった。遅刻だ。思わず跳ね起きる。

入社してから六年、一度たりとも遅刻なんてしたことなかったのに。これじゃ間に合わない。

反動のように起こる脳貧血と、窓から流れ込んでくる強い光で一瞬、目の前が真っ白になる。

ベッドの横に揃えてあるスリッパを履き、一歩踏み出したときだった。

僕はやっと気づいた。

白いカーテン、白いベッド、白い床、白い棚
――すべてが白一色の小さな部屋。

――どこだ、ここ。

枕元に垂れ下がる物体。見たことがある。ナースコールだ。思い出したように鼻も活動を始める。消毒液のにおい。清潔でいて、妙に落ち着かない気分にさせるこのにおい。

――病院？

そう、病院だ。なんで僕はこんなところにいるんだろう。

やけに重く感じる足をなんとか動かして、とりあえず目の前の白いドアを開けてみる。

ちょうどドアの前にいた、台車を手にした看護婦と目が合った。彼女は目を丸くし口を開けたまま、台車を放り出してもと来た道をあわてて戻っていってしまった。

――失礼な。化け物でも見たような顔をして。

当たらずとも遠からず、だったかも知れない。少なくとも、その看護婦にとっては。

僕はその後すぐに、駆けつけた医者に鏡を手渡され、こう言われたのだ。

「あなたはもう何十年も眠り続けていたんですよ。意識が戻ったのはまさに奇跡です」

医者の話では、僕は二十八歳のとき事故にあい、今は六十五歳。つまり、三十七年もの間昏睡状態だった、ということだった。

「嘘だ」

つぶやいてみても鏡の中の自分が本当だといっている。別人のようになった顔が、時の流れを確かに示していた。自分より年上に思えるこの医者たちも、鏡に映る僕よりは明らかに若いのだ。

「嘘だ……」

何かの間違いだ。僕が六十五歳？　そんなバカなことがあるもんか。

三十七年？　知らない。知らない！

そんな長い間、僕はただ眠っていたっていうのか。

僕はただ、起きただけだ。目を覚ましただけなんだ。なんでこんな長い時間を突きつけられなきゃならないんだ。

「悪い冗談だよ」

騙そうとしてるんだ。僕を騙して何になるんだか知らないけど。

だってそんな理不尽な話ってないじゃないか。

目が覚めたら僕はすべてを失っていました。仕事も、若さも、そして人生における三十七年という長い時間も。

すべて、すべて、すべて、すべて！　そんなバカな！

気がついたら、医者の襟元をつかんで問い詰めるように叫んでいた。涙があふれて、顎からしずくになって落ちるのがわかる。

深刻な顔の医者や看護婦。
「近衛さん、とにかく落ち着いてください」
僕を哀れむような、痛々しい表情で医者が言った直後、ひとりの看護婦の表情が変わった。
何かに気づいた様子で、パッと明るくなる。
「ほら近衛さん、奥さんがいらっしゃいましたよ！」
――奥さん⁉
「奥さん！　近衛さん、意識が戻られたんですよ！」
「お電話したんですけどもう出られた後だったみたいで、いらっしゃらなくて……」
口々に話しかける看護婦。しかし彼女には何も聞こえていないようだった。
彼女の目は僕に釘付けになっていた。
やがて、涙が目の端からこぼれ落ちる。
「おかえりなさい」
ずいぶん年老いてはいたが、彼女の顔は確かに見覚えがあった。
「……咲子？」
僕と同い年の、僕の恋人。
僕にとっては昨日のようなもので、彼女にとっては三十七年前をともに過ごした、僕の婚約者。
彼女が――この、深くしわの刻まれた年配の女性が――。
涙で今にも崩れそうな笑顔。それが彼女の答えだった。

――Yes

「あ……あぁ……」

うめき声ともなんともつかないような声が、のどの奥から漏れ出した。

これは悪夢だ。

こんなことが、現実であるはずがない。

そうだ。これは夢なんだ。

頬をつねってみれば、きっと布団の中の僕は夢から覚めるはずだ。

そう思って、頬に手を当てる。冷たい手の感触。

そして、軽い痛み。

嘘だ。現実であるはずがない。

僕の頭は、あくまでこの状況を受け入れようとしなかった。

無意識に、頬にあった自分の手に噛み付く。

周りにいた看護婦や医者たちは、僕が何を始めたのか理解できず、呆然と、ただ、見ていた。

僕の手から血がにじみ、それが僕の唾液と交じり合って腕を伝い落ちるころ、咲子が叫んだ。

「やめて！　何やってるの⁉」

その声で、多分、そこにいた全員が我にかえった。もちろん僕も含めて。

血だらけになった右手の治療を受けている間に、僕の頭はずいぶんと落ち着いてしまった。

人間というのは意外と強くできているものだ。

自分自身が手の肉を噛みちぎってまで否定しようとしたこんな状況でさえも、僕はいつのまにか

納得してしまっていた。

病室のベッドに腰かける僕の傍らには、咲子が座っている。

なんとなく言葉が出てこなくて、頭の中でうまい言葉を探し続けていた。

聞きたいことなら、たくさんあった。

何から聞けばいいのかわからないほどに。

僕のこと、会社のこと、三十七年間に起こった世界の変化のこと、

そして、この三十七年を、咲子はどうやって過ごしてきたのかということだ。

「奥さんだって名乗ってたの、バレちゃったね」

不意に、彼女が口を開く。とても照れくさそうに、ひとことひとこと選ぶようにゆっくりと。

「籍なんか、まだ入れてなかったのに」

「僕はずっと、考えてたけどな」

そう、僕は眠る前からずっとそのことばかり考えていたんだ。

「ねぇ、私もう、奥さんでいいよね？」

少し、不安そうな声だった。

長い眠りの後で、気が変わったりしていないか心配だったのか。

「……君は僕の奥さんじゃないよ」

「え？」

「まだね。ちゃんと婚姻届を出そう。まだ昼だから今からでもいい。もっとも君がこんなじじいとじゃ嫌だっていうなら別だけど」

一瞬沈黙した後、彼女はふっと笑った。

「恥ずかしいですよ。じじいとばばあで婚姻なんて」
「そんなこと、かまわないよ」
顔を見合わせて、僕らはしばらく笑った。

僕らはそのあと、本当に届けを出しに行った。
帰り道、子供みたいに手をつないで歩きながら、僕は言った。
「晩婚になってしまったね。本当にすまなかった」
「あなたのせいじゃないんだから謝ることはないわ」
「でも、三十七年も待たせてしまった」
口に出してから、言うのはとても簡単なことだと気づく。
僕にとって、この三十七年は架空の年月だった。

しかし、目の前の彼女は三十七年という本当に長い時を、実際に生きてきたのだ。
「じゃあ、ひとつだけ、願いをかなえてくれる?」
彼女は無邪気に笑った。三十七年の年月など感じさせない、あのころそのままの笑顔で。
「新婚旅行に連れて行って」
「……新婚旅行?」
「そう。昔一緒に遊んだところ覚えてる? あのタンポポがもう一度見たいの」
そうだ。子供のころ、ふたりで一緒に遊んだあの小さな土地。一面にタンポポが咲き誇っていて、僕らは綿毛を飛ばして遊んでいたっけ。
「じゃあ、今から行こう」
子供のころに遊んでいたようなところだ。
数十分もあれば歩いていける。

「ちょっと待って。準備がいるの」
咲子は途中で家により、古ぼけたカメラを取ってきた。
「まだ、フィルムが残ってるのよ」
そういうところも変わっていない。
こいつは、たった一枚フィルムが残っているだけで、一年だろうと二年だろうと現像に出さない。一枚なら適当に撮ればいいじゃないか、と昔言ったことがある。
彼女は、どうでもいい写真を一枚とるくらいなら現像しないほうがいい、と答えた。
大切なものだけ、撮りためていたいらしい。
このフィルムにも何年前の景色が写っていることやら。

目的地に着いたとき、僕らは目を疑った。
あのころと、本当に何も変わっていない。
目が覚めるような黄色い花たち。やわらかな風が吹き、舞い上がる綿毛。
僕らが子供のころに遊んだ土地だ。
咲子はああ言ったものの、本当に変わらない景色を見られるなどと思ってはいなかった。
なのに、ここの土地はまるで、あのころから時が止まっているかのようだった。

僕らは昔座った石の上に、同じように並んで腰掛けた。
言葉を失ったようにタンポポの群生を眺める。
しばらくして、思い出したように、咲子がカメラのシャッターを切る。

そして、ゆっくり話し始めた。

「あなたが事故にあって……、はじめのうちはね、このまま二度と目覚めないんじゃないか、って思ったりしたの。もしそうなったらどうしようって。何日もそればかり考えて、夜、横になっても全然眠れなかった」

僕はどう返していいのかわからず、ただ、黙っていた。

「考えないことにした。信じることにしたの。いつ目覚めるかなんてもちろんわからなかったけど。今日は目覚めなかった。でももしかしたら明日は目覚めるかもしれないでしょ？　こう考えれば希望が尽きることなんてないもの」

僕に向かってシャッターを切り、子供のように笑いながら話す、その言葉が痛かった。

「ずっと、何考えてたかわかる？」

「……いや」

「あなたに最初に言う言葉。あなたの寝顔を見ながら、三十七年間ずっと考え続けてきたの。あなたが夢を見ている間、私はずっとあなたが目覚める時の夢を見てたのよ」

少し、視線を下げて続ける。

「結局、『おかえり』しか言えなかったな……」

残念、という表情だった。

「僕は……君になにもしてやれないのかな」

「なんで？　私は幸せよ。なんたって結婚したばかりなんだから」

僕の暗い表情を変えようと、おどけてみせる。

僕は少しため息をついて、足元に生えているタンポポをむしった。

「本当に君は強くなったね。いや、僕のせいで、強くならざるをえなかったのかな。でもね、僕が起きたからといって君は幸せになれたとは限らないだろう。例え後十年はやく起きていたとしても、もしかしたら僕は君にとってよい夫になれなかったかもしれない。今の僕も同じだよ。三十七年もの間、眠っていただけの人間に魅力はあるのかな？　僕は、君に何も与えてあげられない」

咲子は少し寂しい顔をしていた。

「私が……、何かを与えて欲しくて、代償が欲しくて、あなたを待ってたとでも思ってるの？　私は、あなたが一緒にいてくれることだけで十分だわ」

「そうだね。僕にできることと言えば、ただ、これから先、一緒にいることくらいだ」

僕は言いながら、彼女の髪に花冠をかぶせた。

少々不細工だが、三十七年の寝起きで手先がおぼつかない状態で作ったにしては上出来だろう。

驚いている隙に、彼女の手からカメラを引ったくり、彼女に向けてシャッターを切る。

「覚えてるかい？　作り方は君が教えてくれたんだ」

咲子は今日初めて、心の底から、満面の笑みを浮かべた。

その顔に向けて、僕はもう一度、シャッターを切った。

一ヶ月後、咲子は急逝した。

死に顔は、花冠のときと同じくらいの笑顔だっ

た。

僕とともに過ごした一ヶ月、彼女はいつも幸せでいられただろうか。

葬式の最中、僕はそればかり考えていた。

彼女との別れはもちろんつらかった。

ただ、彼女が幸せだったのなら、満足なようにも思えた。

僕が起きるのがあと一ヶ月遅ければ、僕も彼女も、ともに楽しい時を過ごすことなどなかったのだから。

彼女の葬式から三日が過ぎた日、庭に植えた木に花が咲いた。

この花の名前は知らない。咲子が植えていたものだ。

僕はひとり、この花の姿をカメラに残した。

自分が植えていた花だ。咲子もフィルムを無駄に使ったと文句は言うまい。

そして、それがフィルムの最後の一枚だった。

これで、やっとタンポポの冠をかぶった咲子が拝める。

僕はすぐにフィルムを現像に出すことにした。はやく見たかったのだが、この町には短時間で現像してくれる写真屋がなかった。しかたなく、カレンダーに丸をつけ、指折り数えて引渡し日を待つ。

引渡し日には、開店直後に店へ駆け込んだ。

店員から写真を受け取り、金を払って店を出ようとする。

「近衛さん、そのフィルム、いつから入ってたんですか？」
「さぁ、咲子が使ってたもんだからいつから入ってたことやら……」
「かなり古いものじゃないかと思うんですが……実は少し像が緩んでるんです」
「あぁ、まぁかまわんよ。しかたないんだろ」
「すいませんねぇ」

帰る途中、僕は待ちきれず、写真の入っている袋を開けた。
一枚目は、一面のタンポポが写っていた。一ヶ月前のものだ。
次は僕の顔。視線をやや下に向けている。
次の写真には花冠をかぶって呆然とする咲子の顔が映っていた。
ということは次が、僕の見たかった笑顔の咲子なんだろう。期待して次の写真を見た。
だが、そこにあったのは、一枚のぼやけた写真だった。
咲子の顔ではない。

――僕の顔だ。
一枚前のようなさえない表情ではない。満面の笑顔だ。
像がぼやけてあまりきれいには写っていないが、僕にはわかった。

――これは……三十七年前の写真だ。

写真には三十七年前の僕と咲子の姿が写されていた。
四・五枚ずつ、違う場所で撮られている。
当然、そのすべてに、見覚えがあった。
僕が昔、彼女と一緒に行った場所だった。

これが咲子の大切な写真。
それらは、三十七年間、カメラが使われていなかったことも示していた。
僕は、彼女の時を止めていたのだ。
彼女の写真で切り取られる大切な時は、常に僕とともにあった。

最後の一枚は一ヶ月前、僕が撮った花冠で笑顔の咲子だった。

僕が一番見たかった写真。幸い上手に撮れていた。

彼女はきっとこの瞬間、自分は幸せだと感じてくれていたんだろう。

へたくそな冠の下で、彼女はいつまでも笑い続ける。切り取られた時の中で、そう、永遠に——。

あとがき。

この本を手に取っていただき、まことにありがとうございます。
注意書きにもありますようにこの本は、著者がここ十五年ほどの間に
書き殴ったものの中から適当に見繕ってまとめたものです。
改変・修正前の元文章＋この本に載せなかった話は後述の個人サイトに
ありますので、よろしければアクセスしてみてください。
拙さ MAX な感じではありますが、良くも悪くもバリエーション豊かな
内容にはなったかと思います。お暇潰しになれば嬉しい限り。
以下、言い訳コメント兼ねて、解説代わりの軽い自己ツッコミを。

[牛]
烏楽イラストの表紙に騙されて手に取った方、一話からえらい話で申し訳ございません(汗　高校時代の作を大幅改変。お話調でホラーなんだかサスペンスなんだか。

[居眠り]
だからどーした、以外の何ものでもない話。学生時代電車の中で見かけた人がそのままネタになりました。今は自分がそんな感じです。頭ぶつけても起きないョー。

[大王降臨]
今となってはそんな話あったなぁ、なノストラさんのネタ。清花、すごい妄想癖ですね。よっぽど辛いことがあったんでしょうか。心配です。

[Gatekeeper]
血みどろのようでどこか間の抜けた雰囲気。意外と珍しい話になってますね。
決して望みを叶えない門……どこかが激しく矛盾してそうです。

[Duplicate Key]
特定の言葉を入れることを条件に作ったキーワードショート。
お題は「水」と「タイヤ」でした。
案外うまく雰囲気を変えられたので満足。
ちなみに指紋認証、モノによっては
本当に指切り取っても使えるらしいです。
実際切り取られる事件があったとか。
怖いですね。

[高き塔より]
私がそうです。高いところでは近寄らないでください。そもそも高いとこ上りませんが。昔から人突き落とす悪夢ばっかりみたんですよねぇ……。

[Strangers]
異邦人および変な奴の意味あいで。友人からは「レベル E っぽい」と言われました。彼らは意外といい関係だと思います。

[僕の罪]
ほぼ全部会話文。二段組にするとちょっと読みづらいですね。人格同士が会話出来るのは創作の世界だけだと言われたりもしますが、実際どうなんでしょうね？

[夢見るものたち]
一番まともです。比較的最近に書いたものと思ってたらもう十年以上前でした。
五つのうち四つ以上使わないといけないっていうキーワードショートで、お題はシウマイ・カレンダー・カメラ・タンポポ・晩婚。……晩婚ってお前(汗
元ネタになったのはアメージングストーリーの「ドロシーとベン」。話は全然違いますが。ベンジャミン＝近衛です。ヤツも目覚めてから、リハビリすることもなく普通に起きて歩いてました(笑

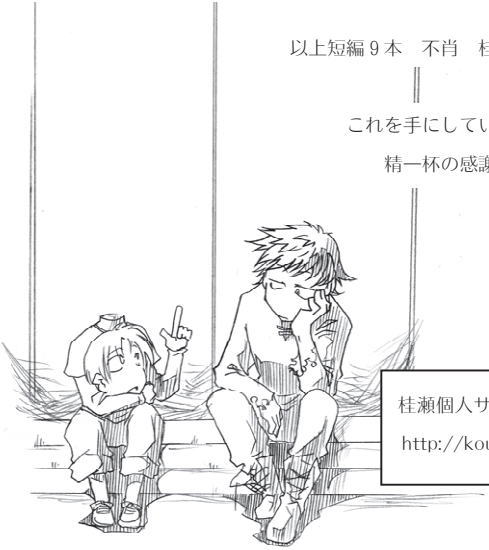
以上短編９本　不肖　桂瀬がお送りいたしました

‖

これを手にしていただいたすべての方々へ

精一杯の感謝となけなしの愛を込めて

2013 年 5 月　桂瀬　衣緒



桂瀬個人サイト［光塔館］

http://koutoukan.siestaweb.net/

夢見るものたち-桂瀬衣緒短編小説集-

初版発行日 ： 2013 年 5 月 19 日
配信開始日 ： 2016 年 5 月 5 日
発 行 元 ： SiestaWeb
発行責任者 ： 桂瀬 衣緒
連 絡 先 ： webmaster@siestaweb.net
http://www.siestaweb.net/

Copyright 2016 SiestaWeb, All rights reserved.